

稱讚

二六二号

二〇二四年一〇月一日発行

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺
〒二二一〇〇七五
東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号
TEL 〇三―五二四二―二〇二五
FAX 〇三―五二四二―二〇二六
HP shousanji.com

二〇二四年度 稱讚寺門信徒会費
年会費 六千円
振込先 城北信用金庫 一ツ家支店
名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会
代表 北村 信也
□座 普通 6176051

さればかたじけなく、わが御身おんみに
ひきかけて、われらが身の罪惡ざいあくの
ふかきほどをもしらず、如来の御ご
恩おんのたかきことをもしらずして迷まよ
へるを、おもひしらせんがためにて
候そうらひけり。

『正像末和讚』より

九月二十三日(月・祝日)に、秋のお彼岸法要を
おつとめいたしました。法要には、門徒総代の安達
光成さん・中木原乃既子さん・早崎光弘さん・高橋
八重子さん・山下陽子さん・中木原さんの娘さんの
松宮代史さんがご参拝くださいました。
おつとめは『仏説観無量寿経』を読誦しました。
住職の話は、この観無量寿経に説かれている内容
をかいつまんでお話しいたしました。
主人公の韋提希夫人は、王子である息子・阿闍世
に幽閉されたとき、お釈迦様に「何の因縁があつ



て、あんな息子を産んでしまったのか。何故、お釈
迦様と悪人提婆達多とは親戚関係なのか」と愚痴
ともとれる言葉で嘆き叫びます。お釈迦様はそれ
にはお答えならず、様々なお浄土を示し、その中、
阿弥陀様のお浄土を選びしめます。韋提希夫人が
どうしたらそのお浄土に往けるかを問うと、お釈
迦様は定散二善を説きます。説いていると、阿弥
陀さまが現われてきます。韋提希夫人が無生法忍
を得た証なのですが、ご信心を頂いたことであり、

てしまいます。
しかし、親鸞聖人は韋提希をはじめ、観無量寿経
の登場人物全てを「権化の仁」と尊んでおられま
す。それは、韋提希夫人の救いは、特殊なことでは
なく、誰もが救われていく、凡夫が救われる、普遍
的な教えとして、お念仏が説かれていることを、
「権化の仁」で示されたのです。それは、一人ひとり
業は異なるけど、業に妨げられない他力の教えが
浄土真宗という仏教なのです。

最後の下品下生の往生が説かれた後
韋提希は五百名の侍女と共にお念仏
したことが韋提希が救われた經典で
あることを話しました。
それは凡夫が救われる教えであるの
ですが、『涅槃経』では、ご信心を頂い
たはずの韋提希夫人ですが、息子の苦
悩に寄り添うことができないうでおり
ます。それは、ご信心を頂いたら、普
通の者では出来ないことが出来るよ
うになるのではないのだと示している
ようにも思えます。
また、韋提希は凡夫とは言え、お妃
でありますから、特別な人生を送って
おり、一般ではなかなか経験出来ない
こと、悩み苦しみも違うものだと思っ

特集 金子大榮師のご領解 ㊦

『親鸞の人生観』

教行信証真仏弟子章

金子大榮 法蔵館 一九六六年初版

一 総説

『教行信証』の信巻は、前に本願による信心の体を明らかにし、後に信心の開発する相を記すものである。ここに真仏弟子章というは、その後の部の一節である。それは『大経』に阿弥陀の名を聞いて信心歓喜するものは不退転に住すと記されてある。その「不退転に住す」るものこそ真仏弟子といわれるものと顕わすものである。

それでこの一章ではまずもって真仏弟子という名の意義を解説し、ついでひろく聖教によりて真仏弟子の徳が顕わされている。そこには念仏者にあたえられる現生の利益というものがある。それは宗教的生活とはいかなるものであるかを教うるものともみられよう。仏教信者の道といっても、これより他にはないようにおもわれる。それだけ身につきあてて受容せねばならぬことである。

本文 真仏弟子といふは、真の言は偽に對し、仮に對するなり。弟子といふは釈迦諸仏の弟子なり。金剛心の行人なり。この信行によりて、必ず大涅槃を超越すべきがゆへに真仏弟子といふ。

口語訳

真の仏弟子とは、真は偽でなく仮でないこと。弟子とは釈迦諸仏の弟子ということである。その真の仏弟子といわれるものは、即ち金剛心の行人である。その人は本願の信行によって必ず大涅槃を超越する。その故に真の仏弟子といわれるのである。

一 そのはじめは仏とは釈迦であり、弟子とは釈迦の教を法として清浄の生活をした舍利弗・目連等の人びとであった。それらの人びとは出家して戒律をまもり、和合してさとり道の道を行く僧といわれたのである。しかしその仏・法・僧に帰依して人倫の道を修めようとせる在家の人びとは信者といわれたのであった。

しかるに仏とは覺者ということである。真理をさとり、正法を知る、それを仏ということである。したがって仏というも正法とはなれてあるものではない。仏とはこれ法身である。また僧というも、正法に順うから仏弟子といわれるのである。しかれば仏・法・僧というも、その体は一つであるといわねばならない。したがってその仏・法・僧に帰依して人間生活を行う在家の信者もまた仏弟子といわれるべきであろう。仏弟子とは出家であるという形にあるのではない。それで『般若経』には「仏の説きたまへる諸法の実相を知るものは仏弟子である」と説かれてあるのである。

ここで仏弟子と信者とは一つとなる。しかしこの二つの名は、いずれも捨てがたいものがある。仏とは覺者である。しかれば仏弟子とは覺者の弟子ということである。そこには真実の人生観をもっているという気位もあるであろう。弟子であるというところは謙虚であるが、仏の法に順うものであるということにおいては、内なる誇りともいふべきものがあるようである。その誇りは、敬い慎む意味を持つ信のこころである。

しかし師の教をうける弟子は、さらに後に来るものの師となるということがあるのであろう。禅のときは、とくに師あり弟子ありて伝鈔せられていくようである。しかるに親鸞にありては、つねに仏弟子であることをよろこびつつ、人師となることを

願わなかった。親鸞は弟子一人ももたずといわれる。その点よりいえば信者の名こそふさわしいものであろう。「名利に人師を好む」ことを耻ずる身には、仏弟子ということも、ただ信者のよろこびである。ここに本願を信するものが真の仏弟子であるといわれた。その親鸞の心境には、まことに懐かしいものがあるのである。

しかるに弟子とは、とくに僧の名であるということになれば、あらためてその真なるものと仮・偽なるものとの別が反省せられる。たとえ仏教を学んでも正法をさとることができないならば、仮の仏弟子といわねばならない。また僧と名告ついてもそのところが仏法に反くものならば偽の仏弟子といわねばならぬであろう。ここに親鸞の真仏弟子の領解は、その仮と偽との反省にもおよんでいるのである。

二 そこで「弟子とは釈迦・諸仏の弟子なり」と解説された。仏とは覺者ということであるから、それは釈迦だけでないことはあきらかである。したがって人間の関係において釈迦の弟子といっても、正法の意味においては諸仏の弟子にちがいない。ここに仏弟子といわれるものは、釈迦の人格を尊重しても、その修証においては、釈迦にたよらず独立してあるものでなければならぬものがあるのである。

しかし道を求める人間にありては、師弟の因縁ほどに深く感ぜられるものはないのであろう。この世には師弟愛にまさる純粹なるものはない。したがって人間にとりての最上の幸福は善き師があることであるといっても過言ではないのであろう。それだけ法においては独立でなくてはならぬことが知られておりながら師をはなれることができない。その感情はとくに師をうしなえるときにおいてあらわ

往生と成仏について

徳永 一道氏

『ビハラーの往生と成仏』
ビハラー医療団編

二〇一五年八月二十九日三〇日
第一五回ビハラー医療団研修会講演録

曾我量深のユニークな往生理解

大谷派の断トツのといいますが、飛び抜けた思想家ともいいえますか、曾我量深という教学者が次のようにおっしゃっています。

『教行信証』の中で、教巻と行巻は確かに完成しています。しかし、信巻は完成してはいわねぬ。

このようなことを言うと、われわれの方の学者は怒るわけです。「信巻」が一番大事なところですから、親鸞聖人の思想は完成してないのかということになるわけです。しかし、曾我量深先生は、完成してないと堂々とおっしゃるのであって、大変な度胸をしておられるわけです。

また化身土巻も完成しているとはいわれぬ。

：往生と成仏の問題でございしますが、往生、成仏という点にも多少未完成な所がありはしないかと思えます。それなら蓮如さまは完成されなかったであろうか。どうもそれもはっきり完成されたというわけにもいかぬであろう。そうすると、親鸞聖人のみ法というものは、今日我々が完成しなければならぬと思う。これは我々の責任であるといっても差支えないと思います。

（『往生と成仏』二六頁）
親鸞聖人も蓮如上人も往生浄土の理解について

完成していないが、「私」が完成させてやると言っているということになりますね。「往生するのは今だ」ということを曾我先生はおっしゃりたいわけです。本願を信じ、念仏申すことによつて、我等の心の中に浄土が開けてくる。その浄土が開けてくるのが、如来の廻向でありますから、如来のおたすけというのであります。そして、その如来にたすけられたすがたを往生と申すのであります。如来にたすけられるということは、信の一念におたすけにあずかるものでありますから、往生は信の一念に成得するものである。そういう意味を、本願成就の文のなかに、親鸞聖人がくみとられたのでありましょう。

（『往生と成仏』六六頁）
ずいぶん大胆な説ですが、われわれとしてはどうい受け入れ難いわけです。親鸞聖人はそこまでおっしゃったのかどうか。しかし、曾我先生は親鸞聖人は未完成だから、自分が完成させるのだというのです。往生浄土は信の一念の問題であるというところをおっしゃりたいわけです。

ところが、晩年になりますと曾我先生も変わってきます。

わたしは金子先生のお話は長い間わかりませんでした。いま、やっと少しばかりわかりました。：それがこのごろ、やっと、少しばかりわからしていただきまして、未来の安楽浄土、自然法爾……南無阿弥陀仏

（『金子大榮著作集』別巻三二三四五、三三六頁）
金子大榮という人は、曾我量深と並ぶ大谷派の碩学です。大碩学と言ってもいいでしょう。その金子先生の話はわかりませんでした。往生浄土の問題に関して、曾我先生と金子先生は折り合うことがなかったのです。対談の本もありますが、お二

であろうか。それはただ念仏のところに信受せられる如来の本願力の他ないのである。人間生活をして大涅槃に帰せしめたい、ということが如来の本願である。それは差別動乱の人間生活にかけられたる本願の世界である。ここでわれらは一応、差別を人間の関係において、動乱を一生の変転において見ることにしよう。とすれば老・少・善・悪を差別してもそれぞれの業縁のつながりにあるかぎり、すべての人の救われる普遍の法でなくては、誰一人も救われることはないであろう。そこに一切衆生の救われる一如の浄土が願われているのである。またわれらの一生は苦・楽・悲・喜の変転極まりなきものである。したがって、それぞれの時において無限の大悲を感じることもなくば、一生は無意味のものとなるであろう。しかれば転変の人生を永遠の無為に帰せしめるものは大悲の本願であらねばならぬ。その大涅槃へと信心の智慧が導くのである。

しかし差別動乱の人生がそのままに大涅槃の境地となるのではない。一如無為の境地は人間生活の彼岸にあるのである。だからその証は来生にと期せられるのであろう。されどその彼岸はこの世を超えてこの世を包み、その来生は現生を超えて現生を覆っているのである。

これに依り真仏弟子はまったく現生の利益を説くこととなった。ここに大涅槃を超証すということの意義がある。超証するものなればこそ現生の利益があるのであろう。その人生に与える功德利益は、この世の外に浄土はないというような見識をもってはたして感知し得るであろうか。超証の語、深く身につけねばならぬものがあるのである。

（一）総説 全文

れてくるのである。その事実は釈迦の入滅を悲しめる弟子たちにも深く感ぜられたのであった。釈迦はすでに自分は死んでも法身は不滅であると遺言されたのである。弟子たちもそれを素直に聴受したのである。されどそれにも拘わらず釈尊の入滅に胸をうって慟哭せるのであった。しかしてその悲しみの中から、はじめて真実に心から法身の不滅を知り、さらに諸仏の発見ともなったのである。

こうして釈迦から次第に諸仏へと、思い及べることには弟子たちの心機の開眼であった。しかればここに「釈迦・諸仏の弟子なり」といわれた親鸞のころも、ただそのことばかりで済まされぬものがあるであろう。「釈迦如来かくれましまして二千余年をへており、その「遺教」もかくれてわからない。されど本願の教を説く高僧たちによりて釈迦の正意が伝えられた。それで親鸞はいま法然上人に教化せられることとなったのである。まことにこれは「諸仏方便ときいたり、源空ひじりとしめしつ、無上の信心おしへてぞ、涅槃のかどをばひらきける」ものと思わずにおれないものである。ここに「人によって法を重んずることと、「法に依りて人に依らない」ことが一つとなる。それは親鸞の深い感激であった。

三 しからばその釈迦・諸仏の弟子とされる資格は、如来の本願を信ずることである。すなわち「金剛心の行人」であることである。「たとえば金剛は長き時、水の中になっても爛壊せず、また変易せぬように、菩提心は量りなき世かけて生死の中にあって、もろもろの煩惱業にまとわれていても断滅することなく、また損滅することがない」。真実の信心はその菩提心である。しかれば「量りなき世かけて生死の中にあり」といっても、畢竟はわれらの

一生において内感されることであろう。愛と憎しみ、煩惱業はつねに善心を汚し、よく、法財を焼く人間生活である。されど本願を信ずる心は、憶念相續してかわることなく断えることがない。しかしその信心は、煩惱を転じて菩提となし、悪業を和らげて柔軟心とならしめるのである。

その「金剛は即ち無漏の体なり」と説かれている。無漏とは純粹清浄ということである。その純粹に清浄真実といわれるものは如来のところに他ならない。しかれば信心を金剛心ということは如来の清浄真実なる願心を受容するものであるからであろう。そこにまた金剛は無上の宝であることが思い合わされる。したがって信心を金剛心と呼ぶことには、信心の高貴性をあらわす意味もあることであらうか。

しかるにこの真仏弟子の資格を「金剛心の行人」とすることは、後で「弥勒大士は等覺の金剛心を窮める」と対比せられてある。その等覺というのは大乘の聖道において、長い修行ののち、いよいよ一歩で成仏するという位である。そしてその位にあるものを金剛心に住すとうのである。これはその位に至れば、いかなる煩惱業も作ることなく、純粹清浄の身となるから、諸仏に等しき覺を得るのである。しかるに、信心の行者は臨終の一念に至るまで煩惱業を離れることのできぬものである。それにも拘わらず大涅槃の終りを期することができぬ。その意味において弥勒と同じく等覺の位にあるものといわれる。それは親鸞にありて深く感銘となつた。それで、そのことを明らかにするために、この真仏弟子章の後半が頭わされ、また『末灯鈔』の御消息にも、そのことが繰り返されている。こうして金剛心の行人は弥勒と同じく諸仏に等しきがゆえに真仏弟子と呼ばれるのである。

四 これ金剛心の行人はかならず仏のさとりに至ることができ、それで真仏弟子といわれるのであるということとは明らかとなった。しからばその仏のさとりにいたるとはどんなことであろうか。それは「必ず大涅槃を超証する」からである。本願を信じ念仏することが必ず大涅槃を証することとなるのである。碍りなき光のうちに自身が見出し出されて、その照覧の光に大悲を感じ、それを命としてたのみ、その念仏が人間生活を大涅槃へと帰せしめるのである。それは念仏の身において大悲の願心が信受せられるからである。本願は慈悲と智慧とのかぎりなき如来のころである。人間とはその如来の本願のかかっている存在である。そのことを念仏するものは素直に信受するのである。そしてその本願力が信心の行者を大涅槃にいたらしめるのである。

しかるにそのことを明らかにするためには、何よりも大涅槃の意義を知っておかねばならない。涅槃 Nirvana は寂滅・無為を意味し、動乱のなかつた状態である。だからその言葉の意味では、風の前の静けさであったり、「苦は色かえる松風の音」であったりでは、真の涅槃とはいえない。

しかれば人間生活を離れて出家修行するといつても、真の涅槃の境に達することはできぬのではないであろうか。それを涅槃というならば、それは小涅槃といわねばならない。これに対して大涅槃といふことが求められることとなったのであろう。大涅槃とは大般涅槃である。般涅槃は完全ということである。完全なる涅槃であるから円寂である。それは人間生活を離れずして人生を尽くして感ぜられるものでなくてはならない。しかし人間生活とは反涅槃のものであり動乱極まりなきものである。その人間がどうして大涅槃を証することができる

人とも意見が違っています。しかし、往生浄土の問題に関して、やっと少しばかりわかった。

ここでは「未来」という言葉を使っておられます。これは金子先生の説に従って、死の一念、臨終の一念に往生浄土ということを受け入れられた表現なのかどうか。大谷派の小谷信千代先生は、曾我先生が非を認めて金子先生に同調したのだと理解されていますが、実際にご本人に訊ねてみないとわかりません。しかし、往生浄土の問題を、現世において語ってきたことについて考え直したというのは事実だと思います。

私も宗派でも同じような説を主唱した方がおられます。上田義文先生の往生理解です。上田先生は、名古屋大学の唯識共学の碩学です。晩年は、親鸞聖人の思想に非常に没頭されました。

私は本願寺国際センターで、浄土真宗の聖典を英語に翻訳する作業を四十二年やっていますが、そのうちの何年間かは、実際の翻訳はされませんが、上田先生が監督、エディターという立場にあつたことがありますので、上田先生の思想をよく知っているわけです。この先生も晩年変わっています。信心決定者の生は、それが生死の中にある点では、滅度を目指して（滅度に向かって）歩みゆくものであると同時に、生死を超えた願海に帰入している点では、滅度を自己の根底としているわけである。だから信心者が滅度に向かって進むことは、かえって自己の根底へと還ってゆくことにはかならない。

（「親鸞の往生の思想について」

『浄土教の思想と文化』五〇頁）

上田先生はご自分の唯識の解釈から、自己の根底に滅度という悟りがあるということをおっしゃっているのだと思います。自己の根底に滅度、悟りが

あると。これは浄土真宗が絶対に受け入れられないことです。それを堂々とおっしゃっていました。

「私の根底に仏陀がいる。私の一番奥底に仏性がある」という説は、親鸞聖人の説にはなじみません。あくまでも私は罪悪生死の凡夫である。どこを探しても悟りの根源はない、悟りのかけらもないというのが親鸞聖人の立場です。ところが、上田先生は自己の根底に悟りがある、滅度があると堂々とおっしゃっているわけです。それが晩年になると、曾我先生と同じように変わります。

この一文は嘗て伝統教学の学者たちからいわゆる異安心として非難・排斥されたものであり、その余蘆は今日もまだ消えないでいるらしく見えるが、私自身のこの論文に根本的な欠陥があることを、その後の研究によって気づいた……

専門の学者たちは、信心獲得のときに不退の位に定まると説かれても、そのことはあまり問題にしないで、即得往生と説かれていることを非常に問題にしているが、親鸞の思想において、この場合重要なのは、むしろ往生よりも不退の位である。（『親鸞の思想構造』一〇三頁）

私の属する本願寺派勸学寮は「伝統教学のメッカだ」と言われることがあります。とんでもないです。三部経と七高僧と宗祖のお書きになった聖教以外に伝統教学などという教学はどこにもありません。上田先生は、そのように決めつけておいでになります。伝統教学が意味するのは「保守的教学」と言いたいところなのでしょう。

とにかく、上田先生は自分で非を認めたのです。自己の恨的に悟りがあって、信の一念に生死を超えてしまう。そこに滅度の要因が入ってくることに、その非がわかったとおっしゃっています。

ご自分はそうお考えになっていたのでしょうか、どこも、とにかく今、悟りの世界に目覚めるのだ、あるいは悟りに入るのだというような説は撤回されたわけです。曾我先生と同じように、「自分は凡夫の身であつて悟りの身になる、あるいは悟りの世界に足を踏み入れることはあり得ないことだ」とおっしゃっているわけです。

このように往生について、ほかにもたくさん議論があります。往生成仏という問題については、親鸞聖人の思想の中では議論を大きく呼び起こしてきたトピックです。このことを承知しておいていただきたいと思えます。浄土真宗教学の教えの一番中心になる問題は、往生浄土の問題です。これをもどのように受け止めるかです。

「現世での成仏」と誤解しやすい親鸞聖人の文

親鸞聖人が残された御文には、「曖昧な」と言う失礼になりますが、現世で往生を語られたと受け止められやすいような叙述があるわけです。それで問題になった例を一つご紹介します。

信心よろこぶそのひとを

如来とひとしときたまふ

大信心は仏性なり

仏性すなはち如来なり

（『浄土和讃』・『註釈版聖典』五七三頁）

この和讃で、信心歓喜する人はつまり信心の人は「如来とひとし」と、如来ではないかという根拠に用いられるお方もいるわけです。

信心をうるをよろこぶ人をば、『経』（華嚴經・意）には、「諸仏とひとしきひと」と説きたまへり。

（『一念多念文意』・『註釈版聖典』六八四頁）

この信心をうるを慶喜といふなり。慶喜するひとは諸仏とひとしきひととなづく。

〔唯信鈔文意〕・『註釈版聖典』七二二頁(…)その名(そかはりたれども、正定聚・等正覚はひとつころ、ひとつ位なり。等正覚と申す位は、補処の弥勒とおなじ位なり。弥勒とおなじく、このたび無上覚にいたるべきゆゑに、弥勒におなじと説きたまへり。

さて『大経』(下)には、「次如弥勒」とは申すなり。弥勒はすでに仏にちかくましますれば、弥勒仏と諸宗のならひは申すなり。しかれば、弥勒におなじ位なれば、正定聚の人は如来とひとしとも申すなり。浄土の眞実信心の人は、この身こそあさましき不浄造悪の身なれども、心はすでに如来とひとしければ、如来とひとしと申すこともあるべしとせたまへ。

〔御消息集』一一通・『註釈版聖典』七五八頁)ここで注意していただきたいのは、傍線のついているところです。親鸞聖人は弥勒と「おなじ」とおっしゃるけれども、正定聚の人は如来と「おなじ」とはおっしゃらない、「ひとし」です。「等」と「同」の違いです。あるいは「同」と「等」の違いです。弥勒等同なんてひっくり返して言いますが、この言い方は非常に曖昧であつて誤解を招きやすいのです。

「弥勒におなじ位なれば、正定聚の人は如来とひとしとも申すなり」と、「如来と同じ」とはどこにもないのです。「弥勒におなじ」「如来にひとし」という言葉はたくさん出てきますが、信心の人、つまり正定聚の人が如来と「おなじ」だとは一度もおっしゃっていません。如来だとはおっしゃっていないという事は如来でないわけです。それは浄土にいないということなのです。「ひとし」と「おなじ」を使い分けられているのです。「ひとし」と「おなじ」の使い分け

を研究した論文が幾つかあります。どれも同じことを言っています。親鸞聖人は、「如来とひとし」とはおっしゃったけれども、「如来だ」とはおっしゃっていない。つまり信心の人は、この世で悟りを開いた人だとはおっしゃっていないということなのです。まことの信心をえたる人は、すでに仏に成らせ

たまふべき御身となりておはしますゆゑに、「如来とひとしき人」と『経』(華嚴経・入法界品)に説かれ候ふなり。弥勒ははまだ仏に成りたまはねども、このたびかならずかならず仏に成りたまふべきによりて、弥勒をばすでに弥勒仏と申し候ふなり。その定に、眞実信心をえたる人をば、如来とひとしと仰せられて候ふなり。

〔御消息集』三二二通・『註釈版聖典』七九四頁)御たすけありたることのありがたきよと念仏申すべく候ふや、また御たすけあらうずることのありがたきよと念仏申すべく候ふやと、申しあげ候ふとき、仰せに、いづれもよし。ただし正定聚のかたは御たすけありたることよろこぶころ、滅度のさとりのかたは御たすけあらうずることのありがたきよと申すころなり。いづれも仏に成ることをよろこぶころ、よしと仰せ候ふなり。

〔蓮如上人御一代記聞書』本一九
『註釈版聖典』一三三八頁)なども誤解しやすいところです。

これは私どもの研究での、今のところの結論です。これで判断していかなくてはいけない。親鸞聖人による「本願成就文」の解釈の御文は、いかようにも受け取れるような表現が出てくるのですが、ほかの御文を見まして言葉遣いから判断すると、決して信心獲得のときに浄土に生まれた人と同じようなことになるのだと、そういう悟りを得たことに

はならないという結論がおのずから出てくるという事です。

まだまだ申したいことはたくさんありますが、一応、これで本日のテーマに添ったお話をさせていたいただいたつもりです。ありがとうございました。



表紙の像の写真は、明らかに親鸞聖人です。これは、高橋さんのお宅にあるもので、檀那さんが骨董屋さんで一目惚れされたものです。

箱には、「鏡の宗師像」と書かれております。まさに親鸞聖人「鏡の御絵像」(国宝)を写し立体化したものです。

作者は、彫刻家 北村西望(1884～1987)あの「長崎平和祈念像」の作者です。長崎出身。北村西望氏が常におっしゃっておられた言葉が、「清い心でやらない」といいものではない「だそうです」。

生涯600点以上の作品を手がけ、仏さま・菩薩さまなどの作品も多く残されておられます。因みに住職とは親戚関係ではありません。

言葉の意味を変えてしまった戦争

相愛高校一年

角谷 美玖さん

「戦わなければ殺されたんだ。」戦争の話をしたがらなかつた曾祖父が、母にたつた一度だけ苦しそうに言った言葉。開けてはいけない記憶の扉を開けてしまった罪悪感を母は今でも思っているのに、乗り越えることができないほどの苦しみを、曾祖父は独りずつと抱えて生きてきたのだと思うと心が痛くなった。

曾祖父は、うなぎや太刀魚が大嫌いだった。戦時中に使った武器を連想させ、その当時の記憶が蘇るからだそうだ。その話を聞いて、ふと先日テレビでウクライナの今を取材した報道番組を思い出した。テーマは「言葉」だ。長引くロシアとの戦争が、ウクライナの人々の言葉の意味あいを変えていっているという内容だった。

例えば、ある人にとっては「お風呂」が以前はリラククスできる場所だったのに、今は爆撃から身を守るための場所となり、ある人は、かつて恋人と聞いていた庭先に落ちる「りんご」の音が、ミサイルの音を連想させるようになったそうだ。大切な思い出や自分の中のイメージが、戦争と結びつき、その言葉の意味を、記憶

を変化させてしまっていたのだ。番組を通して、どこか他人事のように思ってしまった遠い国で起こっている戦争の体験が、曾祖父の辛い経験と重なった。現実にもなお行われている人と人の殺し合いが、これからも心に消えることない傷を残して繰り返されていくのだと思うと心が痛くなった。

曾祖父のように心の傷に生涯悩まされる人を一人でも減らすために、戦争を知らない私たち世代に何ができるのか。「人同士が争い、多くの人が傷つき嘆く中で、一人幸福を見出すことは難しい。しかし、争いを鎮めようとする人が話し合うなか、一人傷つき不幸なままでいることの方がより難しい」。これは母があるご住職から聞いた言葉だが、この言葉の中に答えがあるのかもしれない。人と争うのではなく、お互いを尊重し合いながら生きていくこと。私にできることはこれぐらいのことしかないけれど、少しの思いやりが周りを幸せにしていける。独りひとりの小さな一歩が、人から人へのやさしさがやがて大きな輪になって伝わり、平和へとつながっていくと私は信じている。

一つだけの命

龍谷大学付属平安中学三年

竹村 紗南さん

家の棚を整理していると、偶然小学四年生の時の国語の教科書が出てきた。「懐かしい」なんて思っページをパラパラめくると、「一つの花」という戦争

をテーマにした物語を見つけた。この物語は「一つだけちようだい」が口ぐせのゆみ子という女の子の話だ。食べ物が少ない戦時中の日本で、配給されたわずかな食料で食いつないでいたゆみ子の両親。いつもお腹を空かせていたゆみ子は「一つだけちようだい」と食べ物欲しがらる。そんなゆみ子に両親は「一つだけよ」と言い、自分たちの分からゆみ子に分けてあげていた。この物語はまさに「いのちの尊さ」を伝えてくれる素晴らしいものだった。

戦争に行くゆみ子のお父さんは、見送りに来たゆみ子に「一輪のコスモスを渡す。そして、「一つだけのお花、ダイツにするんだよ」と言った。どうしてお父さんは、いつも「もっと、もっと」と欲しがらるゆみ子に、最初からたくさんのお花を渡さなかつたのだろうか。それは、お父さんが、ゆみ子に「一つだけ」の大切さを教えたからだと思う。「一つだけ」というのは他に代わりがきかない。だから人は一つだけの物を特別だと考え、大切にしている。一つだけの花、つまり一つだけの命を大切にしたい。そんな思いがこの物語には込められている。

戦争は「一つだけ」を殺す。一つだけの家、一つだけの家族、一つだけの学校。人のかけがえのない「一つだけ」を大切にしない。他に代わりがある、ただの消耗品だと思っている。私たちは、ゆみ子と同じように何でも山ほど欲しがらる。どんなにたくさん与えられても満足しない。それは、国が貧しいからではない。本当の平和な時代を築いていくには、かけがえのない「一つだけ」の命を大切にすることが重要だと考えた。世界の人々の「一つだけ」がいつまでも続くような世の中になることを願っている。

稱讚寺一〇月行事予定

16日(日)午後2時
のんのん法話会

25日(金)~31日(木)
鹿児島・稱讚寺永代経
で 帰省いたします。



もんぼう しゅうか
聞法は終活でなく

せい かくて
美糧である

二〇二四年「心のともしび」十月カレンダーより

門徒総代会 報告

九月二三日、秋季彼岸会法要のおつとめ前に、今年度最初の門徒総代会を開催いたしました。本来は、五月から六月に開催し、前年度活動報告・決算報告並びに今年度活動予定・予算を審議承認する会議であります。

更に今年度は、門徒総代の任期が二〇二四年三月三十一日で任期満了になっておりました。しかし、四月に福井さんが往生され、寺務の遅れもあり、八月末に書面決議を行っておりました。

門徒総代のお一人の川田原さんには、直接お会いしに参り、承認を頂きましたが、お体のこともあり、今後の門徒総代をご辞退されました。それで、二十三日には、五名の門徒総代さんのうち、お集まり頂ける方ご三人(安達さん・中木原さん・早崎さん)に、あらためて決算予算並びに財産管理台帳の署名・捺印をいただきました。

そして、門徒総代の定数を五人から三人に変更するための寺則変更を承認いただき、あらためてこのお三名に門徒総代(令和六年四月一日〜令和十年三月三十一日)にご就任いただきました。以上の書類を東組・組長さんから署名・捺印いただき、東京教区教務所に提出いたしました。

提出したおり、寺則変更前の門徒総代定数の五名の署名・捺印が必要と指導を受けました。そこで、代表役員である住職より、高橋さんと山田さんに臨時の門徒総代に就任して頂くことに了解を得て、各書類に署名・捺印いただき、教務所で受理して頂きました。

今後は、ご本山より寺則変更の許可がおりましたら、寺則に基づき、臨時の門徒総代の退任届を提出して参ります(ご報告申しあげます)。

編集後記(愚案)

九月十七日の「へいわフォーラム2024」では、国境なき医師団の中嶋優子氏より「本人が実際に趣いた紛争戦争が続いている現地での活動を通して戦争を考えることをテーマとしたお話をお聴きいたしました。

犠牲になるのは、弱者である、子ども、高齢者、女性を含む民間人であることを、まざまざと知らされました。

対談で、コーディネーターの方が「非戦平和」を指す上で、仏教は何を伝えていけば良いのか、どういう姿勢を貫くべきかというようなことを代表として出席していた僧侶の方に尋ねました。その僧侶の方は「慈悲」でしょうかと答えました。あえて主語をおっしゃらなかったのですが、講師をはじめ、多くの聴衆の方も、私(人間)が主語の「慈悲」と受け取られたのではないかと感じました。

「千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要」では、法要前に宗門校の生徒さんの最優秀作文(六頁に掲載)の朗読の後、本願寺総合研究所の方の法話がありました。その中に、「一切衆生悉有仏性」の言葉を述べられました。少し違和感がありました。

「世の中安穏なれ、仏法ひろまれ」。「仏法ひろまれ」とは阿弥陀様の大慈悲のお心に我々が据わり、伝えていくことではないかと思えます。

部派仏教では、「修羅」という界はなく五界が説かれていたが、大乘仏教では「人界」と「畜生」の間に「修羅界」が加えられ、六界を説くようになったと聞いたことがあります。

未だに戦闘がおさまらないのは、この現実の世は仏教が説く「人界」では収まらなくなってきていることを現しているのではないのでしょうか。